【土木計画学研究・講演集　No.21(1)　1998年11月】

若戸大橋建設に際しての博覧会会場設置とその跡地利用に関する研究

A Study on Installation and After Use of a Site for the Memorial Exposition at the Opportunity to Construct the Bridge 'Wakato-Ohashi'*

松尾篤史**，仲間浩一***
By Atsushi MATSUO**，Koichi NAKAMA***

1．はじめに

都市空間における大規模な土木事業が竣工する際にそれを記念した博覧会が実施される例は少なくない。戦前には、埋立地での勧業博覧会等が多くの地方都市でも開催され、戦後は土木技術の進歩を反映して、トンネルや長大橋、大規模な港湾埋立地の建設を記念したイベントが行われてきている。

このような土木施設の建設を記念したイベントの開催は、土木施設の本来機能とは関係がないという考え方もある一方、現代においては都市経営という観点からイベントを有効に活用し、その後の都市空間の開発や都市構造の再編の契機となった例もみられ、都市空間の変遷過程を評価する上で、その影響を論じることも必要と思われる。

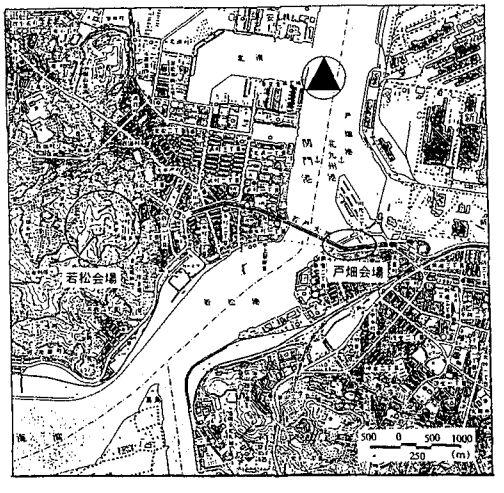

図１　若戸博覧会における戸畑・若松会場の立地

*キーワーズ：景観，公園・緑地，観光・余暇
**学生員　九州工業大学工学部設計生産工学科建設コース
***正員　工博　九州工業大学工学部建設社会工学科
（福岡県北九州市戸畑区仙水町1-1　Tel.093-884-3112
Fax.093-884-3100）

本研究は、高度経済成長期の北九州における一大土木事業である若戸大橋の建設に着目し、その供用時に開催された「若戸大橋完成記念　産業・観光と宇宙大博覧会」、通称「若戸博」を研究対象とする。その会場用地の確保と空間整備のあり方を調べることにより、若松・戸畑の両市街地と会場用地がどのような関係を持ったのかを考察する。さらに現在に至るまでの会場跡地の利用の変遷をたどり、北九州市合併後の若戸地区での都市空間形成に対する影響を明らかにする。図１に研究対象地域を示す。

2．博覧会の概略と会場の建設

昭和37（1962）年9月26日の若戸大橋開通に合わせて、「若戸博」は同年9月28日～11月25日にわたって開催され、延べ入場者数は226万8715人であった。博覧会は福岡県・若松市・戸畑市の共催によって行われ、その会場は、若松市の都市計画公園高塔山公園内と、戸畑市の若戸大橋桁下周辺の２ヶ所に建設された。北九州市への合併を翌年2月に控えた両市にとって、若戸大橋は戦前より度々議論が繰り返された両市合併運動のシンボルとして位置づけられ、両会場は開通した若戸大橋や、両市の共同運航による若戸渡船、および昭和33（1958）年8月に若松観光協会により建設された高塔山ロープウェイを乗り継ぐことにより結ばれていた。

若松会場が設置された高塔山公園は、戦前より都市計画公園として整備、戦後の再整備を経て昭和30（1955）年4月より供用されていた。若松会場では、博覧会開催に先立って公園区域内に遊具施設整備が行われ、昭和37年4月1日に「こどもの国」として既に開園していた。会場設置の際には都市公園の恒久施設として若松市が子供プールを建設、西日本鉄道株式会社が展望休憩所を寄贈している。また、若松

会場用地は急傾斜地を含む山岳であることから、民間企業ではなく自衛隊の第四施設大隊による土工・造成が行われた。

一方戸畑会場は、若戸大橋の橋台付近の、港湾に隣接した平坦地に建設された。会場の設置にあたっては住宅や事務所が混在した私有地4400平方メートルを買収し、公有地と合わせて計22800平方メートルを確保した。会場の施設整備のため、いったん更地にし（写真参照）既存建築と樹木を撤去した後に、恒久施設としての展示館や、造園、および仮設物の配置を行った。

3．博覧会開催時における会場の立地条件と眺望

博覧会開催時点で、既存市街地と若松・戸畑両会場の位置関係や立地条件は大きく異なる。若松会場は前述の通り、博覧会開催以前より若松市民にとって市街地に隣接した自然の豊かな余暇空間であった。会場の設置により、高塔山公園の余暇空間としての機能は強化・付加され、都市公園としての誘致圏も大きく拡大したと言える。一方、戸畑会場は、買収と区画整理により独立した用地を確保した。このため、明治末期以来、路面電車と若戸渡船の２つの公共交通の接点に立地する生活・業務空間としての機能が失われ、既存の市街地との間に若戸大橋の桁下空間を挟んで対峙する空間配置となった。

両会場から得られる市街地や若戸大橋への眺望も大きく異なった。若松会場では会場内部をバス駐車場から順を追って周回できるように園路が設定され、若戸大橋を含む市街地や洞海湾沿いの工場群に対して、展望センターを中心として、幾つかの滞留場所からそれぞれ異なった方角への視軸が確保できるように設計されていた。若松会場は、傾斜・丘陵地という地形条件を利用した総合的な展望施設空間であったといえよう。展望センターからは、小倉・八幡の市街地まで眺望することができ、若戸大橋の架かる洞海湾口の水際線にむかって俯角10°の範囲に若松市街地が分布している。このような視野角の広い眺望景の中で、博覧会の主役である若戸大橋は添景として位置付けられる。これに対し、戸畑会場は若戸大橋の橋詰に近接して立地したため、長大橋である若戸大橋に対して頭上から対岸へと仰観する眺望が得られた（写真２参照）。また戸畑の既存市街地よりも、洞海湾の対岸の水際市街地が主要な視対象となった。

写真１　戸畑会場の整地

写真２　戸畑会場から若戸大橋への眺め

4．会場跡地の利用変遷と周辺市街地の変化

（1）会場跡地の空間構成と利用の変化

博覧会終了後、両会場跡地の空間構成や市民による利用施設の内容は大きく変化した。

若松会場では、博覧会閉会直後に「こどもの国」が民間に払い下げられたが、北九州市の他の観光施設と競合、また観光施設としての陳腐化によって集客力が弱まり撤去を余儀なくされた。また高塔山ロープウェイも昭和40年4月には経営不振のため休業し昭和46年には廃止された。このため、高塔山公園での周回可能な空間構成は失われると同時に、市街地からのパブリックアクセスは自動車と遠距離の徒歩に限定された。また展望センターの裏側に駐車場が設置され、残された展望休憩所から市街地への固定的な眺望が、公園を訪れる人の中心的な体験となっている。このことにより、現在では広域的な観光レクリエーション空間としての機能はほぼ失われ、周辺居住者によって、生活空間に隣接して自然の豊か

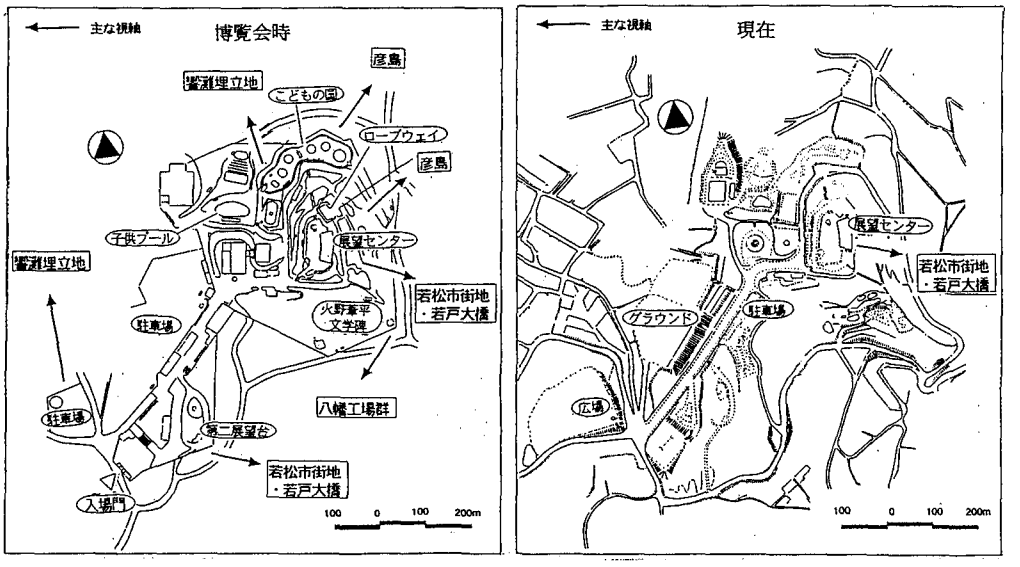

図２　若松会場用地の空間変化

な憩いの場として利用されている。（図２参照）

戸畑会場では恒久施設として建設されたRC3階建ての海岸ビルが残存したほか、港際に面した跡地の一部を都市公園「大橋公園」として整備し、昭和40（1965）年3月に供用している。また、平坦な跡地を外国車展示会等の一過的なイベントに使用したのち、一旦市民によって認知された都市レクリエーション機能を引き継ぐものとして、総合スポーツ施設「若戸スポール」が民間企業により建設され人気を博した。しかし昭和50年代には利用者が減少し、昭和60（1985）年10月に西日本鉄道の路面電車戸畑線が廃止されるのに併せて閉鎖、現在は撤去され空き地となっている。この結果、戸畑会場跡地は一部が小規模な都市公園として維持されているにとどまっている。（図３参照）

（２）周辺市街地の空間構成・交通網の変化

博覧会開催時を中心に前後の３つの時期に関して、公共交通網の変遷をまとめた。

若戸大橋開通前は両市街地を結ぶものは若戸渡船だけであり、渡船場にはバスと路面電車が隣接した結節点となっており、戸畑市街地における表玄関の一つとなっていた。また国鉄戸畑駅から渡船場へと向かう商業機能を備えた区画街路によって、歩行系の軸線が維持されていた。

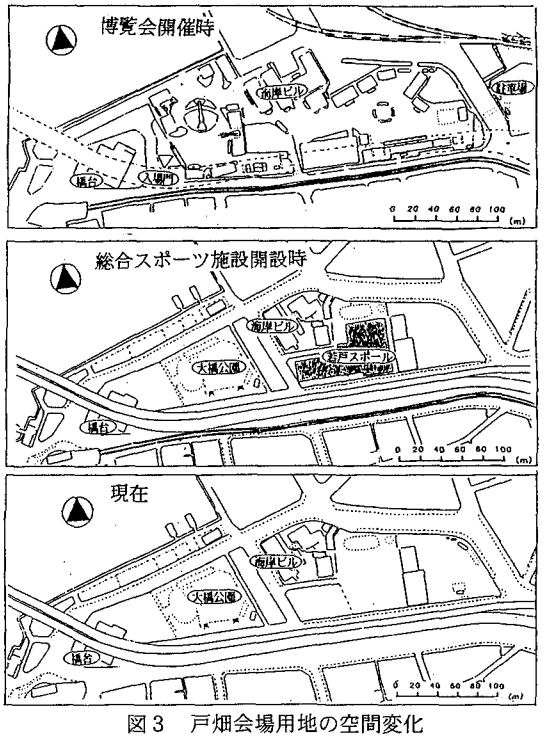

図３　戸畑会場用地の空間変化

若戸大橋開通により、渡船以外に大橋の歩行と自動車交通という手段が付加され、路面電車・渡船・歩行・ロープウエイ、という多様な歩行者のための交通網が一時期定着した。特に博覧会開催時は若松会場へ向かう臨時バス網が敷かれ、大量の来訪者が

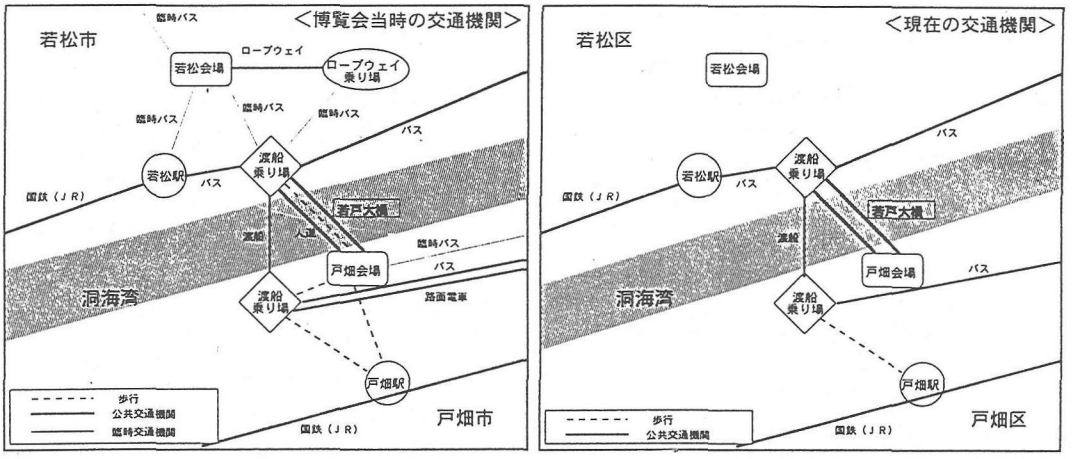

図４　会場用地を接続する交通網の比較

移動することにより２つの市街地は多重的な交通手段によるつながりを持った。その後、現在に至るまでに、索道系交通と軌道系交通が廃止され、市街地や会場跡地相互の行き交いは単一的な手段に固定されるか、あるいは消滅した。（図４参照）

若松会場跡地では、市街地からのアクセスが自動車のみに依存することになり、生活の中での市街地とのつながりは認識しにくくなっている。また戸畑会場跡地では、戸畑駅周辺の歩行軸線の変化、若戸大橋の４車線拡幅に伴う人道の廃止等により、水際での滞留機能が期待されず、交通手段の結節点としての機能だけを有することになった。一旦失われたレクリエーション空間としての機能は現在に至るまで復活せず、また遊休地となった故に本来の生活空間としての機能も存在していない。近年は、会場跡地を含む戸畑駅北側市街地と新たに発展した南側との連携を狙って、駅を挟んで地下道の建設が計画されている。以上に述べた博覧会後の跡地利用と交通網の変遷等について、表１の年表を掲げる。

表１　若戸博に関わる空間変遷の年表

昭和37年	12月7日	会場撤去終了
昭和38年		こどもの国　民間に移転後、閉園
昭和39年	１月	国道１９９号　小倉－若戸大橋開通
	9月27日	戸畑駅新築（現戸畑駅南口ステーションビル）
昭和40年	3月5日	整地した大橋公園に３６０本を植樹し供用開始
	4月1日	高塔山ロープウェイ運行休止（昭和46年廃止）
	6月7日	戸畑会場跡地に総合スポーツ施設若戸スポール開館
昭和59年	5月	若戸大橋拡幅に着工
昭和60年	10月16日	若戸スポール閉館
	10月19日	西鉄電車　戸畑線を廃止
平成2年	3月	都市高速、戸畑―若戸大橋間開通
	３月	若戸大橋拡幅完工（歩道を廃止。車道を４車線に）

５．まとめ

（１）博覧会開催により、若松会場は都市公園として以前から持つ機能を強化・付加され、戸畑会場では旧来の日常的な都市空間からは独立した新たな遊園機能を与えられた。

（２）若松、戸畑の両会場は、各立地場所の地形条件や用地確保の過程を踏まえた空間設計が行われ、大量の訪問者に対してそれぞれ異なる若戸大橋や、北九州市街地への眺望体験を提供していた。

（３）博覧会終了後の会場跡地では恒久施設の撤去や陳腐化が進み、若松会場跡地では本来の周遊性やそこから得られる多様な眺望の魅力が失われた。また戸畑会場跡地では市民生活と結びついた新たな滞在機能を獲得できなかった。

（４）複数の交通機関の連係が消え、会場跡地を取り巻く歩行系の交通手段は衰退した。このため若松と戸畑の両市街地を接続する手段は単一化され、博覧会を契機に産業観光への期待を担った若戸大橋への景観体験も単調なものに移行している。

参考・引用文献
１）若戸博会誌編纂事務局編：若戸大橋完成記念　産業・観光と宇宙大博覧会，1964